

「農業技術の匠」： たわら 俵 まさひこ 正彦 さん（ 長崎県雲仙市 ）

～ 「タワラムラサキ」を始め10品種の「アップルポテト」の育成 ～



俵 正彦さん

1 技術確立の背景(目的)

ばれいしょ栽培においては、土壌病害であるそうか病や青枯病の防除対策として、作付前の土壌消毒が必要とされています。過去に土壌消毒における事故を自らが経験したことや、昭和57年から開始した生協との取引の中で、消費者は農産物に安全性を強く求めていることに気付かされました。そのことが、土壌病害抵抗性を有する品種により土壌消毒処理が回避でき、消費者ニーズに応える個性あるばれいしょの育成研究に取り組むきっかけとなりました。

2 技術概要(技術効果)

当時、「男爵」と「メークイン」がともに100年以上前に「アーリーローズ」という有色系品種から突然変異した品種であると言われていたことから、交配種より突然変異種が優れていると確信しました。1985年から品種改良を志し、突然変異種を見つけるために毎年35ha栽培し、全ての収穫塊茎を自分の目で確かめることから始めました。10年かけて日本で初めての民間育種によるばれいしょ品種「タワラムラサキ」を育成し、その後も9品種を育成し品種登録しました。そうか病、青枯病に抵抗性を有する品種の育成を着眼点に取り組み、無農薬で栽培できる個性的なばれいしょ品種の育成に努め、オリジナルの有色ばれいしょを「アップルポテト」と名付けました。育成した「アップルポテト」は減農薬、少肥栽培下でも多収です。

3 技術の地域への活用状況(普及状況)

平成6年から生協を中心に「タワラムラサキ」の販売(150t)を開始しました。平成12年からは新たに登録になった「タワラヨーデル」、「グラウンドペチカ」も加え、東京、愛知、大阪のスーパーへの販売が500～600t(20ha)に拡大しました。しかし、生産現場での種イモの劣化が進み、徐々に栽培面積の縮小を余儀なくされました。そのため種イモの確保を主眼に置き、原々種生産依頼の実現と新たな品種の固定に重点を移し、販売はインターネットと通販に限定し現在に至っています。

平成20年3月から5品種の原々種のサンプル栽培を開始しました。現在、独立行政法人種苗管理センター北海道中央農場(春作用)及び同雲仙農場(秋作用)にて、10品種の原々種作成に取り組んでもらっています。平成22年秋作は15ha、300tの採種生産を計画しており、全国からの要望が多かった種イモ生産ができる状況になりました。

平成23年度に種ばれいしょ販売業者より既に100tの予約を受けています。さらに、大手食品販売会社よりアップルポテトを800t利用したいという構想が上がっています。

※最寄りの普及指導センター { 長崎県島原振興局雲仙地域普及課
住所：長崎県島原市西八幡町8509-2
TEL：0957-63-0111

<技術のポイント>

土壌病害抵抗性の有色・良食味ばれいしょの民間育成

- ①減農薬・少肥栽培下でも多収であり、特別栽培や有機栽培のニーズに応える。
- ②通常、青枯病、そうか病の対策としてクロルピクリンを中心とした土壌消毒が行われている。
本育成品種は青枯病、そうか病抵抗性を有しており、全国で年間9000tの使用実績のあるクロルピクリンを使用しないばれいしょ作りに貢献できる。
- ③赤色の皮にはポリフェノール、黄色の皮にはベータカロチンが豊富に含まれている機能性食品で、青果はもちろん、色あがり、食味に優れているためポテトチップスやフライドポテトなど農業の6次産業化に対応でき、加工用ばれいしょとして産地の活性化にも寄与できる。

【品種登録一覧】



「タワラムラサキ」
肉色はクリーム色
青枯病に強
多収・連作可能



「サユミムラサキ」
肉色はクリーム色
青枯病に強
多収



「タワヨーデル」
肉色は濃黄色
そうか病に強
早生・多収



「グラウンドペチカ」
肉色は黄色
極多収



「タワラマガタマ」
肉色は黄色
そうか病に強
早生



「タワアルル彦星」
肉色は黄色
多収



「タワホリス北極星」
肉色はクリーム色
玉数少・大玉
多収



「タワラマゼラン」
肉色は黄色
緑化しにくい
極多収（春・秋）



「タワ長右衛門宇内」
肉色はクリーム色
そうか病に強
多収



「タワラ小判」
肉色はクリーム色
そうか病に強

※耐病性は育成者の観察評価による